

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷二十第

行發日一月三年十正大

論叢

地方所得稅と他地方交渉問題……………法學博士 神戸 正雄
 唯物史觀公式中の一句に就て……………法學博士 河上 肇
 獨逸流通稅の變革……………法學博士 小川郷太郎

時論

取引所改善の要點……………法學博士 戸田 海市
 注意すべき小作人問題……………法學博士 河田 嗣郎

說苑

生計費研究法を論ず……………法學博士 森本 厚吉
 所得分配統計……………法學士 汐見 三郎

雜錄

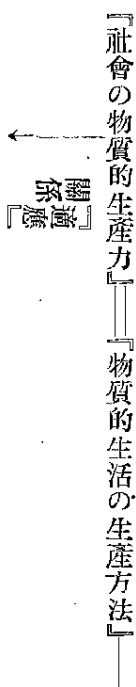
プリーフェーアの統計要覽……………法學博士 財部 靜治
 ビュツヒヤト文庫……………法學博士 小川郷太郎
 自由貨幣運動……………法學博士 河田 嗣郎

マルクスの唯物史観公式中の一句に就て

河 上 肇

一、本論の問題——之に關する異説

マルクスが其の著『經濟學批判』の序言に載せし唯物史観の公式は、次の文句を以て始まる。
『人類は、彼等の生活の社會的生産に於て、一定の、必然的の、彼等の意志より獨立したる關係に、即ち彼等の物質的生産力の一定の發展階段に適應する所の生産關係に、入り込むものである。此等生産關係の總和は、社會の經濟的構造——それは法制上及び政治上の上層建築が據つて以て立つ所の、又一定の社會的意識形態が之に適應する所の、眞實の基礎たるもの——を成す。物質的生活の生産方法は、一般に社會的の、政治的の、及び精神的の生活過程を條件づける。』私は此等の句をば、嘗て自著『近世經濟思想史論』⁽¹⁾に於て、次の如き表に書き替へた。(表中)『内に入れたる文字は、總てマルクスの用語)。



論叢

マルクスの唯物史観公式中の一句に就て

第十二卷 (第三號)

一七

三六一

人と人との『生産關係』

『精神
の
等
和
論』

社會の『經濟的構造』

『法制上及び政治上の上層建築』

『社會の意識形態』

『生活過程』

『精神の等
和論』

今この短文に於て問題としやうとする所は、右の表に於て、『社會的』の『生活過程』を社會の『經濟的構造』に配當し、『政治的』の『生活過程』を『法制上及び政治上の上層建築』に配當し、『精神的』の『生活過程』を『社會の意識形態』に配當することの、是非如何といふことである。さうして茲に斯様の事を問題にするのは、他の學者は私と違つた解釋を採つてゐるやうに見えるからである。

(一) トエニースの⁽²⁾説によれば、『かの文章に於て、最初には社會現象の三分割が提言されてある、即ち

(2) Toennies. - Archiv für Geschichte der Philosophie VII, 894, S. 504. (Hammacher, Das philosophischökonomische System des Marxismus. 1909, S. 191. に引用する所)

經濟的構造

法制上及び政治上の上層建築

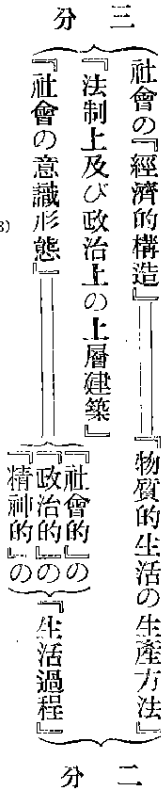
社會の意識形態

といふことになつてゐる。しかるに直ぐ次ぎには、その二分割が表はれてゐる。即ち

物質的生活の生産方法——社會的存在

社會的、政治的、精神的的生活過程——社會的の意識

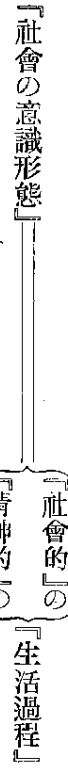
といふことになつてゐる』と云ふのだから、之を圖表にすれば、次の如くなる譯である。



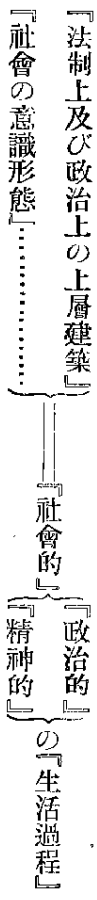
(二)しかるにバルトは⁽³⁾此の説を非なりとして、次の如く述べてゐる。『現象の區分の數は(前後とも)同じである。只第二の文句では、社會の意識形態といふ中へ一緒にされてゐたものが、社會的生活過程と精神的的生活過程とに分解されて居るだけで、政治的の生活過程といふのは、第一の文句に在る政治上の上層建築に相當し、その中には法制上の上層建築も包含されてゐるのである。』前例に従つて之を圖表にすれば、次の如くなる。

(3) Barth.—Arch. f. Geschichte der Philosophie VIII, S. 333. (同上に引用する所)

『法制上及び政治上の上層建築』 『政治的』の『生活過程』



(三)ところがハムマツヘルは⁽⁴⁾以上の二説を共に非なりとし、自分は次の如く解釋すると云つてゐる。『マルクスは第一の文章に於て、經濟的構造の上に建てられてゐる總てのものを分つて、法制上及び政治上の上層建築と社會の意識形態との二つと爲したやうに、第二の文章に於ては、社會的生活過程を、政治的のものと精神的のものに分つたのである。從て其れは次の如く讀むべきである。——物質的生活の生産方法は社會的の、即ち政治的及び精神的の生活過程全般を條件づける。』氏の説に従へば、圖表は次の如くなるべきである。



(四)なほ當面の問題に直接の關係はないが、序ゆる露國マルクス主義の父と稱せらるゝブリュハート⁽⁵⁾の説をも、茲に掲げて置かうと思ふ。彼は次の如く述べてゐる。『今日有名になつてゐる『基礎』と、それと同様に矢張り有名になつた『上部建築』との關係に就ての、マルクス及びエンゲルスの意見を簡單に言表すならば、吾々は次の定式を立て得る。

(4) Hammacher.—System des Marxismus, S. 191, 192.
 (5) 獨譯 Plechanow, Die Grundprobleme des Marxismus, 1910, S. 77.

1、生産力の状態。

2、前者によつて條件づけられた經濟關係。

3、經濟的「基礎」の上に成立せる社會的—政治的關係。

4、一部分は直接に經濟により、一部分は其の上に成立せる社會的—政治的秩序により、條件づけられたる社會的人間の心理。

5、この心理の性質を反映する所の、種々の思想。』

この定式は、マルクス及びエンゲルスが唯物史觀について抱懐しむたりを、ブリエハーフの認むる所のものを、表に纏めたのであるから、茲に問題とする所の、「經濟學批判」に見はれたるマルクスの公式の解釋と、必ずしも直接の關係を有するものでは無いが、只、經濟的基礎の上に『社會的』『政治的』の關係が先づ成立し、さうして其の經濟的基礎並びに『社會的』『政治的』の秩序により、社會意識が制約せられてゐると解釋する點に於て、マルクス説に謂ふ所の『社會的』關係に對する彼れの解釋は、前掲の三者と又異なる所ありと思はるゝが爲め、序を以て茲に列記した次第である。

之を要するに、ブリエハーフは姑く舍くとするも、トエーニース、バルト、ハムマツヘルの三氏が、マルクスの『物質的生活の生産方法は、一般に社會的、政治的、及び精神的の生活過程を

條件づける』と云へる文句に對して下せる解釋は、皆互に相違し、且つ何れも余の下せる解釋と同じくないのである。即ちトエーニースは『社會的』の、『政治的』の、及び『精神的』の『生活過程』全部を以て『社會の意識形態』に相應するものとなし、バルトは其中『社會的』及び『精神的』の『生活過程』の二者を以て『社會の意識形態』に相應するものとなし、ハムマツヘルは又、『社會的』の『生活過程』を以て『政治的』及び『精神的』の生活過程に分解さるゝものとなし、最後に余は、『社會的』の『生活過程』といふ句をば、人と人との『生産關係』の『總和』たる『經濟的構造』に相應するの句となすのである。簡單なる此の一句に對し、此の如く多様の解釋を下し得る餘地あることは、寧ろ不思議なことであるが、博覽の學者は此の外にも猶ほ異說を擧げ得るかも知れない。吾は、人間の言葉の如何に不完全であるかを、今更に考へさせらるゝ譯である。

二、自說の論證——異說の批判

さて此の如く種々の解釋があるが、私は其等の異說を通覽した後、虚心に考へて見て、なほ自分の解釋を正しとしたいやうに思ふ。以下簡單に其の理由を述べらう。

第一の、且つ最も重要な理由は、社會又は社會的といふ言葉に對するマルクスの慣用が、私の解釋を裏書するといふことである。此の場合、此等の言葉の今日に於ける普通の用法如何といふ

ことよりも、マルクス自身の用法如何といふことが、大切であるのは言ふを待たぬが、私の見る所によれば、マルクスは屢々社會的といふ言葉を經濟的といふと同じ意味に使つてゐると思ふ。現に茲に問題としてゐる『經濟學批判』の序言の中にも、次のやうな句がある。「余は余の研究により、法律關係並びに國家の形態は、其れ自身によりて理解さるゝものでなく、又所謂人間の精神の一般的发展によりて説明さるゝものでも無く、寧ろそは、物質的の生活關係——之が總和はヘーゲルが第十八世紀に於ける英佛の例に倣うて「市民社會」(bürgerliche Gesellschaft)なる名稱の下に包括せしもの——に之が根據を有するものなる事、しかも此の市民社會の解剖的研究は之を經濟學に求むべきものなる事、の結論に達した。」——(なほ『資本』第三卷の終りの場所にはDas Ganze dieser Beziehungen, worin sich die Träger dieser Produktion zu Natur und zueinander befinden, worin sie produzieren, dies Ganze ist eben die Gesellschaft, nach ihrer ökonomischen Struktur betrachtet 『生産の擔當者が自然に對し將た相互の間に於て有する所の此等の關係、彼等が其の内に在つて生産する所の關係、此等關係の全體が、經濟的構造より見たる社會なるものである』といふ句があるが、これも略ぼ同じである。)——之によつて見れば、マルクスは『物質的の生活關係の總和』(それはマルクスが『社會の經濟的構造を成す』と稱せるもの)をば、『市民社會』に相當するものとなし、その『市民社會の解剖的研究は之を經濟學に求むべきものなる事』を述べてゐるの

である。即ち物質的生活關係の總和と謂ふも、市民社會と謂ふも、經濟的構造と謂ふも、マルクスにとつては殆ど同じ意味なのである。尤も此處ではヘーゲルの名稱を其のまゝ、襲用して『市民社會』と謂つてゐるのだから、直ちに之を以て、マルクスが社會又は社會的といふ言葉を、經濟又は經濟的といふ言葉と、同じ意味に用ひてゐると云ふことの、適切なる證據となし難いといふ疑が生じ得るかも知れぬが、もし吾々がマルクスの他の著述を検したならば、吾々は屢々此等の二語が全く同義に用ひられてゐることを發見するであらう。例へば『資本』第一卷の或る場所には Die Gestalt des gesellschaftlichen Lebensprozesses, d. h. des materiellen Produktionsprozesses (社會的生活過程の、即ち物質的生產過程の状態は云々)といふ句があつて、『社會的生活』といふことと『物質的生產』(即ち經濟)といふことと、明かに全然同義に用ひられてゐるのである。斯かる場合に、マルクスが單に社會的生活と言つてゐるのは、社會的に行はるゝ物質的生活の意味なのである。先きに掲げた『經濟學批判』の序言中にも『人類は彼等の生活の社會的生產に於て云々』といふ文句があつたが、此處でも、『生活の社會的生產』と謂うてゐるのは、『生活に必要な物質的社會的生產』といふのと、全く同じ意味なのである。これは妙な言葉の使ひ方のやうだけれども、それは今日吾々が、社會の經濟組織といふべき所を、簡單に社會組織とか經濟組織とか言つて仕舞つて、その結果社會組織といふも經濟組織といふも、全く同じものを指すのと同じ趣

(7) Kapital, I, S. 45.

である。『資本』第一卷の更に他の場所には *der veränderte materielle Produktionsweise und die ihr entsprechend veränderten sozialen Verhältnisse der Produzenten* (變化する所の物質的生産方法及び之に應じて變化する所の社會的關係)といふ句もあるが、これなども併せて參考に値すると思ふ。何れにしても既にマルクス自身が『社會的生活過程即ち物質的生産過程』といふ言葉を使つてゐる以上、トエニースの如く社會的生産過程を以て政治的及び精神的生活過程と共に「社會の意識形態」に相當するものとなし、又はバルトの如く社會的生活過程と精神的生活過程との二者を以て『社會の意識形態』に相應するものとなし、乃至ハムマツヘルの如く社會的生活過程即ち政治的、精神的的生活過程となすことの、何れもマルクスの眞意を距ること甚だ遠きものたるを、斷言して略ぼ差支なからうと思ふ。

第二の理由は、茲に問題とする所の文章の前後の脈絡より見て、私の解釋が最も自然的だらうと云ふことである。マルクスは先づ、人間は其の『生活(物質的生活)の社會的生産』に於て、相互に一定の『生産關係』に入り込み、其の結果(1)社會の『經濟的構造』を構成するに至ることを述べ、然る後、その經濟的構造を土臺として、(2)『法制上及び政治上の上層建築』が建てられ、更に(3)『社會の意識形態』も之に適應するに至るものなることを述べ終り、最後に之を繰返して總括しながら、『物質的生活の生産方法は、一般に(überhaupt) (1)社會的、(2)政治的、及び(3)精神的の生

活過程を條件づける』と言つて居るので、文理一貫、彼れの言はんとしてゐる所は、虚心に之を讀まば、殆ど疑の餘地なきもの、やうに思ふ。しかるにトエニースは第一の文章の『物質的生活の生産方法』をば、第二の文章の社會の『經濟的構造』に相應するものと誤讀したから、(それは明かに第一の文章の『生活の社會的生産』又は『社會の物質的生産力』に照應する所である)、そこで第二の文章の『社會的の、政治的の、及び精神的の生活過程』を總て一纏めにして、第一の文章の『社會の意識形態』に相當するものと解釋するやうになつた。従つて第一の文章には、社會現象を分つて社會の『經濟的構造』と『法制上及び政治上の上層建築』と『社會の意識形態』との三者としてあるのに、すぐ其れに引續ぐ第二の文章には、『法制上及び政治上の上層建築』等は全く看過されてゐて、従つて社會現象は單に『物質的生活の生産方法』と『社會的の、政治的の、及び精神的の生活過程』との二者に分たれ居るに止まり、前後相違してゐると云ふ解釋を採るに至つたのである。しかしマルクスが其の唯物史観の公式を簡單に書き表はさんとしてゐる際に、斯かる不用意の文章を作つたものとは、——他に可能の讀方のある限り——吾々の信じ能はぬ所である。次ぎはバルトの解釋であるが、既に述べた如く、彼は第二の文章の『社會的の、政治的の、及び精神的の生活過程』といふ句の中から、中間にある『政治的の生活過程』を先づ抜き出して、それをば第一文章の『法制上及び政治上の上層建築』に相等するものとし、次ぎに、この『政治的』の生活過程を挾んで其の前と後とに在る『社會的』の生活過程と『精神的』の生活過程との二者を一纏

めにして、第一文章の最後の階段に出てゐる『社會の意識形態』に相當するものとするのであるが、もしさうであれば、第二の文章の『社會的の、政治的の、及び精神的の生活過程』といふ句は、其の順序を變へて當然『政治的の、社會的の、及び精神的の生活過程』とあるべき筈である。即ち文章構成の常識の上から考へて見ても、バルトの解釋には甚しい無理が在ると謂はなければならぬ。最後にハムマツヘルの解釋は『社會的の、政治的の、及び精神的の生活過程』を解して『社會的の、即ち政治的及び精神的の生活過程』としやうと云ふのであるが、それならば『即ち』といふ文字が原文に挿入してあつて然るべきだと思ふが、しかし文章構成の上から言へば『即ち』を省略したと解されぬこともあるまい。只如何せん『社會的』といふ言葉が『政治的及び精神的』といふ意味だといふことは、常識から考へても、又マルクスの用語例から考へても、到底賛成し難き所である。

之を要するに、私の解釋は獨逸の本國に於ける學者の説と甚しく相違してゐるに拘らず、私は以上の理由により、依然として、自分の解釋をば最も正しいものと思つてゐる。些末に拘泥するやうだけれども、試に思ふ所を述べて、同學の批評を乞ふ次第である。